

八木秋子 著作集 (I)

近代の〈負〉を背負う女



# 83歳の女が老人ホームという環境の中で 尚、自由を求めて自己を燃焼させている 何が彼女をそうさせるのか！

一八九五年に一人の女が長野の木曾福島で生まれた。幼くしてキリスト教の影響を受けた。結婚し子供を産んだ。そして小川未明、有島武郎らと接し《家》を出た。新聞に投書したのがきっかけで神近市子の抜けたあとの東京日日新聞学芸部に入社した。《自覚せる（新しき）女》として花々しく活躍したが、当然のことながら社会の矛盾にも目を覆うことができずいつしか解放運動に参加していった。そして東京日日新聞の退社後、《女人芸術》の編集陣に加わり、林芙美子、上田（円地）文子、吉屋信子、尾崎翠らと共に誌面で小説、評論、紀行文を発表し大活躍をした。

日に日に押し寄せてくる全体主義の波を直観的に感じた彼女はより先鋭的に反権力、絶対自由を求めて高群逸枝、住井すゑ、望月百合子、松本正枝、竹内てるよ、らと《婦人戦線》を発行した。誌上において、日本資本主義の分析を通して、中国大陸への侵略とそこでの米国資本主義との避け難い衝突となおかつ米国資本主義への従属までも予見する評論を発表した。またロシアにおける革命の虚妄を、クロンシュタットの水兵、ネストル・マフノの農村運動を題材にした小説で曝き、いきいきとした文章で多くの人々に感動を与えた。

しかし、都市で大不況のため職にあぶれた失業者は続々と農村へ帰り、その波は一層農村の貧窮を招き、昭和五年頃の農村を巡る環境は悲惨なものであった。彼女は同志に呼びかけ農村自治コムミュニンの建設のため寝食を忘れて農村を駆け回った。そして戦い逮捕された。

以後、四〇年間彼女は筆をとろうとせず、母子寮の寮母などをして底辺での生活を送ってきた。しかし、その視座は変わることなく暗闇から日本の変容をじっと見据えてきた。「私のようなのはみ出した、よけいものにしか真の創造は生み出せない」と。また八三歳の今日こうも語っている「八三歳というじぶんの年齢もわきまえ、前途には老衰と死があるだけだと思ふ。その覚悟を肚に据えて、まだすべての終焉までにはいくばくかの時間的余裕もあるうし、わずかな能力の残滓も生活のなかに身をおいて老衰と退歩に抵抗する、抵抗を継続するその闘いの中に、現在の私の生命が光を得て燃えることもあり得るにちがいない。ちがいないという樂觀的な予測は、私が過去八〇余年に経験し、思考のなかで闘ってきた、その闘いのなかで除々に蓄積してきた現在の八木という存在を善かれ悪しかれ信ずるほかないと思ふ」『八木秋子通信「あるはなく」第三号・七七・十一・二〇発行』

日本資本主義の発火点となった日清戦争の直後に生まれた一人の女性が、女として自覚し、そうだからこそ愛する子供とも別れて《家》を出て波乱な生涯を送ってきたその中で、彼女が何を視て、何を思っているか、その著作を通じて識るものは測り知れない。近代をまさにひたむきに生き抜いてきた彼女は、自己に厳しく、かつ体制にあらん限りの抵抗を尽してきた。近代を引き裂く作業は同時に己れも引き裂かれざるを得ない。近代によって切り捨てられた部分を、自らの体験と重ね、彼女はなお言葉を刻んでいる。この書は、その彼女が、高群逸枝について書いたものを含めて、《女人芸術》《婦人戦線》《黒色戦線》時代のものを全部集大成したものである。



〈女人芸術時代〉

林芙美子と九州へ講演会に参加  
左側が八木秋子（34歳）

現在八木秋子は〈前途に安全はあつても道のない老人の国〉に  
いる。その中で生きる証として『あるはなく』という小冊子が昨年七  
月から五号（七八・三・一〇）まで発行されている。著作集とあわ  
せて読んでいただきたい。申し込みは左記まで。

〒187 東京都小平市花小金井南三ノ九二九  
相 京 範 昭  
振替口座 東京 四一四〇九七二  
送料 二〇〇円 定価 一三〇〇円